

## 1%の可能性を信じて

現在、サッカーは日本でも大人気のスポーツである。サッカーの日本代表チームの活躍がニュースでも大きく取り上げられ、サッカー選手を夢見る子どもたちも多い。

しかし、今からほんの1990年ころまでは、日本のサッカー界はプロであるJリーグもなく、サッカーに注目する人も少なかった。世界と日本の壁はあまりにも厚い、そんな時代であった。

一九六七年二月、静岡に、一人の男の子が生まれた。名前は知良（かずよし）。低迷する日本サッカー界の救世主として、後に日本中の注目を集める選手になった。これは「キングカズ」と呼ばれるようになった、その男の子のお話。カズは小さい頃、大変なやんちゃ坊主だった。いたずらばかりで、先生に怒られることも多かった。しかし、仲間や先生が、カズを悪く言うことはなかった。なぜなら、カズは人をおとしめたり、弱い者いじめをしたりするようなことは、決してしなかったのである。悪さはするが、誰にでもやさしい——そんな愛すべき少年だった。

カズ少年が夢中になったのが、サッカーである。兄と一緒に毎日、サッカーボールを追いかけた。サッカーのコーチである叔父もカズをかわいがり、サッカー大国であるブラジルの試合ビデオを見せ、夢をふくらませていった。

しかしカズは、目立った選手ではなかった。小さいときは体も弱く、母に「サッカーなんて大丈夫？」と心配されるような子どもだった。積み重ねてきた練習で、サッカーのテクニクはあったものの、カズの体は細く、小さい。足も速くなかった。兄は静岡代表に選ばれるのに、自分は補欠にも選ばれない——そんな日々が続いていた。

中学二年のとき、叔父に「ブラジルでサッカーをしてみないか。」と言われたとき、カズはすぐに「はい、行きます。」と答えた。サッカーの本場、ブラジルでなら、自分のテクニクが生かされると信じていたのである。カズはプロ契約を果たすまで、日本には帰ってこない決意をした。そして高校1年の冬、ついにブラジルへ渡る資格を、カズは手にした。



しかし、周囲は反対した。ブラジルは世界一のサッカー大国である。カズのような日本でも並の選手が成功することはありえないことだった。高校の監督も「人間一〇〇%はないが、お前は九十九%無理だ。」と止めた。ドリブルなどのテクニックはあったが、体も小さく目立った選手ではなかった。ブラジルでプロになれるとはどうも思えなかったのである。しかしカズは「一%あるんですね。じゃあ、ぼくはその一%を信じます。」と強い決意を揺るがすことはなかった。

世界中に一流のサッカー選手を送り出すブラジル。そこで活躍する道は、やはり、たいへんに険しいものだった。周りも体格や才能に恵まれた選手ばかりである。始めの頃は「早く日本に帰れ!」「とても見ていられないよ。」といったば声を受けながら、カズはプレーを続けた。

しかしカズは、自分を信じ、すさまじい努力を続けていった。体が小さい、力が弱い、足が速くない、といった弱点をカバーするため、得意のドリブルを徹底的に練習した。

フエイント、シュートは、毎日、人の何倍も練習した。倒れそうになり、逃げ出したくなったりしても、カズは歯をくいしばって耐え抜いた。また、体つきも外国人と比べておとるカズは、練習が終わった後、徹底的に体を鍛え抜き、強い体を作っていた。まさに血のにじむ努力の日々だった。

その結果、「フエイントを使ったドリブル」はカズの最大の武器となり、芸術的ときえいられるようになった。ブラジルで、カズのテクニックが通用することがはつきりとわかってきたのである。

ブラジルに渡って6年、21歳のとき、カズにとって忘れられないゲームがあった。相手は「コリンチャンス」。ブラジルの名門サッカーチームである。カズの所属する、キンゼ・デ・ジャウーは小さななかのチーム。誰もが、コ

リンチャンスの勝利を確信していた。ところが、その試合でカズは一点を決め、三対二で見事に勝利したのである。カズはこの試合で、ドリブルで何度もチャンスを作り、ヒーローとしてファンの大歓声をあびた。

そして一九九〇年、カズは名門チームである「サントスFC」の一員になる。一流の選手と認められたからこそその、快挙かいきよだった。

時を同じくして、日本のサッカー界も大きく動き始めていた。日本にプロサッカーリーグ（Jリーグ）が生まれるのである。新たに広がる日本でのサッカー、そして小さな頃からの夢、「日本のワールドカップ出場」…。カズの新たな挑戦が、始まろうとしていた。

カズから、子どもたちへく

（前略）もちろん、それから先は、自分が想像していた以上に苦しい道だった。地獄じごくのような日々、夢なんて何になるんだ！と投げ出したい気持ちにもなった。しかし、ボクは、そのどたん場のぎりぎりのところで踏みとどまることができた。

夢をつなげることができたのは、いったい何だったのかと聞かれたら、うまくいえないけどやはり最後は自分の力を信じたからだと思う。

新しいことをするときには、どんな人間だって不安があるし、まわりから非難はついてまわる。でもボクの場合は、怖さ“よりも”やってみたい“という気持ちの方が強かった。それには自分の力を信じる以外に、何も頼るものがなかった。（中略）



（野村 宏行 作）

# 1%の可能性を信じて

(高学年1—(5))

## (1) ねらい

自分の特徴を知り、自分の長所を積極的に伸ばしていこうとする心情を育てる。

## (2) 資料の特質

キングカズこと、三浦知良選手は、たくさんの日本人に夢を与え続けるサッカープレイヤーである。若くして単身でサッカーの本場、ブラジルへ旅立ち、名門サントスとの契約を勝ち取る。そして帰国してJリーグの黎明期から支え続けた彼の生き方は、児童の多くの感動を与えるだろう。ノンフィクション資料の特性を生かして、リアリティをもたせながら、真剣に話し合う場を設定したい。

## (3) 展開例

- 1 東日本大震災チャリティーマッチの、カズのゴールシーンを視聴する。
- 2 資料「1%の可能性を信じて」を読んで話し合う。
  - ① ブラジルに旅立つカズは、どんな気持ちだったか。
    - ・必ず成功してくるぞ。
  - ② 生活やサッカーで、苦しむカズは、どんなことを考えたか。
    - ・悔しい。負けないぞ。
  - ③ ドリブルに自分の活路を見いだしたカズは、どんなことを考えてサッカーに取り組んだのか。
    - ・ドリブルなら、誰にも負けないぞ。
    - ・ほくなら、きっとできるはずだ。
- 3 カズに照らし合わせて、長所について話し合う。
- 4 教師の説話を聞く。

## (4) 指導上の留意点及び工夫

本時の資料は、1—(2)個性伸長の内容項目での活用も可能である。その際は当然、発問も変わってくる。授業の中で価値がぶれて、見えづらくなるのは避けたいが、多様な価値について、児童が自分のこだわりを発揮させることも、大切にしていきたい。カズへの理解を深める手立ても、今の児童には必要だろう。

〔本文イラストは東京学芸大こども未来研究所による〕